
GATE & PRINCESS 私の心の中に——

緒方 愛子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G A T E & a m p ; P R I N C E S S 私の中の心——

【Nコード】

N 5 8 8 6 E

【作者名】

緒方 愛子

【あらすじ】

愛なんて要らない。私もきつと、要らない子。誰も私を愛してくれない……。涙にくれ、心が荒んでしまった女子高生『古藤ユウナ』は、その衝動とともにある世界へと引きずり込まれてしまう。そして同時にユウナは、一年以内に『問題の無い答え』をそこで探すハメに……。！？——彼女に残された命のタイムリミットは一年。果たして彼女は、無事『答え』を見つけ出すことが出来るのだろうか！？——異世界を舞台にした切ないラブファンタジーです。。

PROLOGUE 1：『人』として――

愛……。

そんなものは要らない。そんなものが無くたって、生きていける。
もう傷つけられるのは嫌。

愛に飢えてるやつは、勝手にしてればいい……。

私は一人。

お父さんは離婚して、お母さんは死んで、

私はいつも一人だった。

誰も私のことなんか愛してくれなくて、

私のことなんか要らなくて……。

生きていることが不思議なくらい、

私の心は荒んでいる。

もう誰とも関わりたくない。

そんな気持ちで、胸の中で渦を巻いている。

遺書を残して

自殺しようか。

そう思ったことも何度かある。

でも結局勇気がなくて、

無駄に魂を削る生活を送っている。

一人でもいい。

一人でも生きていける。

現に今の私がそうであるように。

なんで生きてるんだろう。

知りたいよ……。

PROLOGUE 2：また、一人。

「ユウナ、ごめん。……別れよう」

「え……？」

申し訳なさそうに、でも真面目に伝える青年に、ユウナは戸惑った。

実は、この青年とユウナは付き合っていた。小学校からずっと一緒に進級してきて、高校になってやっとユウナが自分の想いを打ち明けると、思いのほか恋は実り、一年間付き合ってきたのである。

それがいきなり呼び出されたかと思うと、別れ話を切り出された。何かトラブルがあつたわけでもなく、本当に突然のことで、ユウナは二の句が告げなくなってしまった。このままずっと一緒にやっていけると思っていただけに、その破局は辛かった。

「俺……お前と一緒に、やっていけそうにない」

「……どういうこと？」

ユウナは息を吞んでそれを聞いていた。もう涙がすぐそこまで登ってきて、でもぐつと堪えて聞いていた。

「俺……お前と付き合っていて、そこに無理してる自分がいることに気付いて……そんなの、意味あるのかなって」

黒い髪から覗かせる瞳、言葉を選んで、喉に痞えるものをぐつと吐き出すような仕草がとても悲しい。別れたくない、そんな気持ち

が込み上げてくる。でも――

「ごめんね、ハルトがそう言うなら、仕方ないね……」

でも、別れたいと言う相手を無理矢理縛り付けておくのは迷惑だ
って判っている。今の言葉は、自分の本心じゃない。それでも、相
手がそう言うなら、仕方なかった。

ユウナは抑えきれない涙が頬を伝うのに気付いて、思わず振り向
いた。

「じゃ、もう行くからっ……」

そうして、彼女はそこから立ち去った。

夕暮れ時。しばらく川のほとりに佇^{たたず}んでいた彼女は、とうとう家
へと帰ることにした。

「ただいま」

誰もいない家。もう慣れているはずなのに、返事が返ってこないと

言う状況が妙に辛い。

昔は、どんな時に帰っても『おかえり』と言う暖かい言葉があった。行つてきます、の後は行つてらっしゃい。おやすみ、と言えばおやすみ。全てに返事があつて、当時は何気ないことだと思つていたけど、今となつてはこれ以上の望みはないほど、取り戻したい挨拶だった。

赤い光が差し込むリビングに鞆を置く。そして、ぐったりしたように椅子に座り込んだ。

「また一人……失つて……」

また捨てられて、また置いていかれて。自我を崩壊させる言葉が次々と浮かび上がってくる。愛する者がいなくなり、愛されることになくなった。

「寝よう……もう……」

そして、疲れた身体を起こすと、ベッドのある二階へと向かった。

PROLOGUE 3・夢のほとり

――起きなさい

――涙にくれるいたいけな少女よ。

「へっ……？」

どこからともなく聞こえてくる声。男でも女でも無さそうな、中性的な声音。

視界が真っ暗で、まるで何も見えない。眼を開けているのに閉じているような、そんな感覚だ。

「だれですか……？」

――お前の質問に答える義理は無い。

――お前はただ私の言うことを聞いていればいいのだ。

「はぁ……」

ふと気付くと、ユウナ自身も声を出していなかった。

心の中で語り合っているような、テレパシーのような。

――私はお前に一年の猶予をやるう。

――お前は一年以内に答えを導き出すのだ。

「答え？ 何のですか？」

——さもなくば、お前の命はこの世から消滅してしまうだろう。

「ちよつと、え」

（だめだ、こちらの話を聞いてくれない）

「って、命が消滅するってどういうことですか？」

——死ぬことだ

「はっ？」

あまりに簡潔すぎて、その返答が恐ろしく感じられた。

——死にたくなければ一年以内に答えを導き出すのだ。

「だから何の？」

問題が無い答えを導き出せ、なんて無理な要求だ。

「何の答えを探せばいいの！？」

彼女は口調を強める。

だが、やはりその質問には答えしてくれるつもりはなさそうだった。

——では、行くがいい……。

誰かの言葉と共に、急に視界が光り始めた。

「え、いやちょっと」

やがてそれは、暗い世界を白光で包み込んだ……。

CHAPTER 1：ENTER AT THE GATE

……目覚めなさい。

……物語はもう、始まっているのです。

水の跳ねる音。どこから聞こえてくる獣の雄叫び。ひんやりと冷たい空気。

夢が途切れた眠りの狭間で微かにそれを聞き取って、彼女は重い^{まぶた}瞼を開けた。

「うーん……」

まだ視界が掠^{かす}れている。感じるのは寒々しい風と、草のような地面の感触と……。

「はっ！？ あれっ？」

と、突然何かに気付いたように、大きく目を見開いて上体を起こした。

「……」

彼女の視界には、広々とした草原と地平線に薄つすらと浮かび上がる山々に、^{さんぜん}燦然と輝く星と月が映し出されていた。夜は夜なのだが非常に明るいところで、どこか物寂しい雰囲気漂っている。

——あたし、学校終わって、川に行つて、それから帰って……。

彼女は必死に記憶の中を探った。と言っても、探る必要も無かった。どう考えてもこんな場所にいるのは可笑しい。第一、自分の住んでいる場所は都会で、ひっそり閑とした開放感のある草原なんて見たことも聞いたことも無い。

ならば夢か、彼女は思った。確かにそう考えるのが自然である。

しかし、夢にしては景色が繊細すぎるし、いや、感情や意識、草の匂いや感触までもがリアルそのもので、夢と言えばそれはそれで信じ難かった。

とりあえず、念のために彼女は目を擦って頬を引つ叩いたり抓^{つね}ったりしてみた。しかし案の定、やっぱり痛い。

「もういったい何なのよ!？」

彼女の胸に不安が募る。夜の風が身に堪える。

(そういえばあたし、スカートのままじゃん)

学校が終わって、服も着替えずに、疲労のあまりばったりベツトに倒れこんで……。制服のまま。記憶の通りだよ……。

彼女の中に絶望と言つ言葉が入り込んできたとき、背後から男の人の声が聞こえてきた。

「おや、目覚めたようですね」

彼女は咄嗟に振り向く。

「あ、あ、あなたは？」

男を見上げる彼女の中に、夢以外のもう一つの可能性が浮かび上がってきた。

——そう、誘拐だ。

「って、あんたがあたしをこんなわけのわからないところに連れてきたのね！？ それにさっきの声も……いったい何のつもりよ！」

誘拐だ。誘拐以外有り得ない。

そうと決め付けた彼女は、噛み付くように言った。

「あたしを家に帰してよ」

必死に悲願する少女。当然だ。

しかし、男は眉間にしわを寄せ、なんだと言わんばかりに首を傾げていた。身に覚えが無い、何のことだかさっぱりわからないとばかりに。すると、青年は腰を低くして少女の目の位置に顔を合わせた。

「なっなにょ」

顔がだんだん近づいてくる。それはキスとか、そんなのじゃなくて、ただ覗き込むように。じっと何かを見つめるように、だ。

（つてかこいつ、さりげに超格好良いじゃん）

彼女は顔が火照ってくるを感じた。青年のそれとは違い、直視されるのには慣れていない。ましてや超近距離で、もう後握り拳一個分くらいの距離に顔を近付けられては恥ずかしさのあまり、思わず顔を背けてしまう他なかった。

「は、離れて！」

そう言うつと勢い良く立ち上がり、赤面を見られぬようにと俯いた。さっきまでは誘拐犯だと決め付けて咎めるようにつかかっていたのに、今では胸がドキドキして顔も見合わせられなくなっている。人の悲しみに付け込んでハート奪うつもりか。

「あ、あのね！ 誘拐して目覚ましたらいきなりそれって……あんだんだけ飢えてるわけ？ しかも場所悪すぎ、何の趣味でこんなところなのよ」

——つか、何言ってたあたし。

言うだけ言うと、落ち着け、落ち着けと何度も心に言い聞かせた。

彼女の平静を奪っているものは、青年の突然の行動もあるが、それよりも大きいのがやはりこの異端な場所、頭によぎる誘拐、そして急な場面転換であろう。ベッドに寝込んで、気がついたら草原の

上にいた、なんて、混乱しない人がいるだろうか。

しかし、彼の一言が彼女をもっと混乱させた。

「誘拐？ 何のことですか、プリンセス」

その瞬間、さっきの動揺を忘れてしまったかのように、彼女は青年の目をみつめた。

CHAPTER 1：ENTER AT THE GATE（後書き）

いよいよ異世界突入です！

EPISODE 1：あなたはPRINCESS

「はっ？」

彼女は口をぽかんと開けた。

「プリンセスですか？」

「プリンセスです」

「プリンセスって、『姫』の？」

「はい」

「あたしが？」

「はい」

（いや、真面目にボケられても困るんですが）

彼女は歪んだ笑みを浮かべた。だが、青年の表情はまさに真剣なもの。

彼はこんなパニック状態の自分をからかっているのだろうか。いや、それとも本当に真面目にそう呼んでいるのだろうか。もしそうだとしたら、ちょっと脳みその一部分、いや、半分くらいは可笑しいんじゃないか？

でもまだ、いたいけな人だとは決まったわけじゃない。まずは話

を聞いてみよう。

「あの……ちょっと意味がわかりません。もっとちゃんと説明してくれませんか？」

「はい、そのつもりです。いきなりベラベラ単語を並べても、混乱するだけでしょうから」

とても丁寧な物言い。

そのとき、青年の髪が月光を反射する。天衣無縫の銀髪が、彼女の瞳にちらついた。

「まずは自己紹介から」

そう青年が言うと、まるで由々しい存在に跪くかのように、深くお辞儀をした。

「僕の名前はエミル。エミル・アランシア・レムヘルスです。改めてよろしく願います」

風に靡く黒の燕尾服がよく似合う。

いきなり丁重な挨拶から始まって、彼女は一瞬戸惑った。とりあえず会釈する。

「ああ、ええと、あたしは古藤ユウナ」

おずおずと、エミルみたいな覇気がない挨拶だった。

エミルと言う名前を聞いたとき、普通の人ならば「外人？」と疑問に思ってしまうだろうが、もはやそういう有り得ないことや異常なことが重なりすぎて、いちいち懷疑する気力も失ってしまった。

とりあえず、くだらない質問と受け応えは避けたかった。

「では、説明します。少々長くなりますが」

そして、回想するかのように瞳を閉じると、まるで歴史書を朗読するような流暢さで話し始めた。

[illegible]

時は遡ること二十億年前。

この世界、メクラハウム第二世界と呼ばれる世界は、地球生誕より数十億年の後に誕生した。

第一世界（地球）と第二世界はお互いに隔絶され、その存在を知り合うことも無く、ここ二千年ほど前までそれぞれの文明を築いてきた。

そして、運命の二千年前。第二世界はその特殊な力を使って第二世界への狭間をこじ開ける次元^{ゲート}を開通した。

ゲートは第一世界と第二世界を繋ぐトンネルのようなもので、その中は暗くて空洞。移動の際には宙に浮いたような、宇宙に投げ出された感覚になる。

しかし、第二世界は第一世界へ行くことはできなかった。次元はゲート出現する時間・場所と共に、その者の精神状態が大きく左右させるからだ。

そして時は流れ、ちょうど今から二百年前のこと。

ある賢者の魔法の一つ、『予知』を使って、第二世界はプリンセスの存在を表明した。

プリンセスとは第一世界に住む、一見何の変哲もない普通の人間のこと。

しかし、第二世界の者がプリンセスの血を得ると不老不死の身を貰い、プリンセスの身体を得たものは永遠の幸せを約束されるということだった。

予知を行ったものは死に、プリンセス伝説は『古藤ユウナ』と『二百年』と言う言葉だけを残していったんその幕を閉じた。

そして再びそれが幕を開けたのが、ちょうど今、『古藤ユウナ』

という女性が存在する現在だった。

あまりに長すぎて、ユウナは殆ど混乱状態だった。

と言うかこの話が仮に事実だと、私ことユウナはただの女子高生からお姫様へとんでも昇格してしまうことになる。それは喜ぶべきことなのか、それとも……。

確認するように問う。しかし、エミルは首を横に振った。

「え……ちよつとま……」

「そのゲートって、暗いところ？」

恐る恐る聞く。

「ええ。僕は行ったことがないのですが、暗いと聞きますね」

やっぱりか、彼女は思った。

つまり自分は、知らず知らずのうちにゲートと言うトンネルをこじ開けて、こっちの世界に来てしまったというわけだ。

しかし、もしそれが現実だとすると、あそこで聞いたあの声も現実だと言うことになってしまふのではないか。

「あの、あたしがゲートに入ったとき、声を聞いたんですが……」

「ああ、それはきっとシュヴィエラの声でしょう。全世界を統率する最高神です」

シュヴィエラ、最高神。またもや彼女の中に、ひとしきりの不安が湧き起こった。

EPISODE 2：始まりの言葉

最高神シュヴィエラは天地創世を為した神をも総統する頂点の存在。

そのシュヴィエラが下す制裁や課題には拒否権が無く、ただ神の赴くままに従うしかないのだと言う。

ユウナに出されたのは『一年以内に答えを導き出す』こと。

それがどういう意味を指し示すのかは依然として不明だ。

「一年のリミットがあるのなら、ゆっくり考えていけばいいでしょう」

エミルはユウナの顔色を窺い、そう励ましてくれる。

優雅で澄んだ瞳に、ユウナの曇り顔が映った。

「プリンセス」

エミルはおずおずと呼んだ。慰めてくれるのか、と思えば、そうでもなかった。

「申し訳ありません、ここにいますとまずいので、移動しましょう」

「え………？」

「さっきも説明した通り、プリンセスの身体は第二世界にとっては

喉から手が出るほど欲しいモノ。やがてプリンセスの存在もこちらの世界に知られ、不老不死や幸福を願う輩がところ構わずやってくるでしょう。だからこんな見通しのいい草原にいては逆にまずいのです」

すると、エミルは草原の向こうの方を見渡す。

ユウナは「えっ」と声を上げて言った。

「それってつまり……私の命が危ないってこと……？」

話の流れからするとそうだ。少なくとも、大きく履き違えていることはないはずである。

そう考えるとユウナは、急におどおどして、襲い掛かってくる恐怖に怯えた。プリンセスだのなんだの言っても、彼女はまだ高校生で、そして女の子。そんな薄情な現実を突きつけられて、怖くないなんて変だ。

しかし、エミルの煌びやかな横目で見られると、何故か彼女はきょとんとしてしまった。

「命の危険性は少ないでしょう。不老不死と幸福を両方得たいものは血を飲み貴方を傍に置く。幸福だけを得たいものはそのまま傍に置く。不老不死だけを得たいものは血を飲んで後は捨てる。ただ、幸福を得たいものの中には、貴方を奴隷にしたり、妻にしたり、自分のモノにしたりしたい輩もいると思いますが」

「あのおそれ、あたしに良いこと一つもないですよね……？」

思ったことをストレートに伝える。奴隷にしる妻にしる傍に置くにしろ、ユウナの抗う意思が無視されているような気がした。

それより、エミルはどう考えているのだろうか？　これが誘拐ではないと言うことは判ったが、彼もまたそういう輩の一人ではないのか。いくら御丁寧に説明してくれると言っても、彼自身第二世界の住人。ならば、ユウナの身体を狙っているとしても可笑しくない。

「さあ、相手次第でしょうか。……それより、急いで隠れましょう。話はその後でもできます」

エミルは適当に解答し、ユウナの手を引いて森に隠れようとした。だが、ユウナはその場に立ち止まり、思い切った質問をした。

「あの……」

「なんででしょうか？」

「貴方も……貴方も、あたしの身体を狙っているのですか？」

男の子にこんな質問をするのは何か卑しい気もするが、ちゃんと聞いておきたかった。

夢でないのなら、これからどうなるのかもわからない。本当に信頼できる人がいるなら、信頼したい。

すると、エミルは優しく微笑み、ユウナの眼をしっかりと見つめてこう答えた。

「僕は、プリンセスの味方です。それ以外の何者でもありません」

「……」

エミルの瞳は確かなものだった。きっと、信じていいのだろう。

「よろしくね……エミル」

そして、ユウナも心から微笑み返した。

よろしくね……その一言だけで、このときの彼らには、十分な言葉だった。

EPISODE 2：始まりの言葉（後書き）

だんだん物語が進んできましたが
ユウナを待ち受けているモノは想像以上にヤバかったり！？いろんな意味で……。

EPISODE 3：憂鬱 暗い森の中

エミルの引率のもと、ユウナは森の中に入り、さらに奥へと進んでいった。

森の中は草原と違って非常に暗く、たまに月明かりが差し込むくらいで、足元が見えない状態だ。たまに木に触るとコウモリが金切り声を上げて飛んでいたり、得体の知れないものが不気味な物音を立てて蠢いたり、ユウナは驚きに悲鳴を上げてはエミルに叱られ、また叫んでは注意され、と言う感じで、かなり深いところまで入っていた。

何故奥まで行く必要があるのか、と聞いてみたところ、エミルの昔住んでた小屋が森の奥にあって、そこならばらく安全だろうから、と言うことらしい。また、エミルが偶然ユウナを見つけたのも、彼がたまたま小屋を通りかかって、近くの湖で顔を洗っていたからだと言う。

かなりの時間を歩いて、だいぶ目が慣れてきた頃、ユウナは前を歩くエミルに聞いてみた。

「ねえ、エミル。第二世界の、その、あたしを狙ってるやつらって、どんなやつらなの？」

エミルは止まらずに答える。

「第一世界とは違って、この国には法と言われるものがありません。つまり弱肉強食の世界。みんなそれなりの戦闘訓練は受けていて、

気に入らない者や邪魔な者は殺してでも排除する、そんなやつらです」

「え、それじゃあたしを取り合って目の前で殺し合いとかしちゃったりもしちゃう……の？」

「そうですね、プリンセスの身体は一つですから」

思いも寄らない返答。それが真実なら酷すぎる。

とりあえず考えたくもなかったので、話を逸らすことにした。

「ああ、エミル。プリンセスって呼ばなくてもいいからっ。あたし、お姫様とか王妃とかそんな偉くもお金持ちでもないし。ユウナでいいよ」

呼ばれ方がどうかじゃなくて、実際問題そうだ。上品でもないし高貴でもないし偉くもないしお金も無い。権力だつてないし、王族みたいなものとは縁も無かった。だから、少なからず違和感がある。

「わかりました……」

エミルはそこでいったん息をつき、

「……ユウナ」

と、憚るように言った。

ユウナはそんな仕草を見逃さない。

「あり、今ちよつと名前呼ぶの照れちゃったりしたんじゃない？」
からかうように聞いたつもりだったが、エミルは予想外にも冷静に
淡々と答えた。

「いえ、貴方のような目上の方に呼び捨てをしていいのかどうか、
迷っただけです」

ユウナはつまらないとばかりにそつぽを向いた。

どうにも、エミルの仕草を見ていると異性にこれっぽっちも関心
が無いようだった。どんなことにも流暢に答え、淡々と話を進めて
いく。まだ会ってから数時間しか経っていないし性格については不
鮮明だが、どこか紳士的な印象がある。

でも、異性に色情したりそれを求めたりしないのはユウナも同じ。
なぜなら、それが悲恋に終わることを知っているからだ。両親がそ
うであったように、また、自分自身がそうであったように、恋なん
て束の間の幸せで、小さなトラブルや衝突で簡単に崩壊する。成功
する恋なんて、ほんの一握りだと思っている。

一時はあの青年に惚れたこともあったが、それも結局『傷』だけ
を残して儚く散ってしまった。成就する嬉しさより失ったときの辛
さの方が大きいことを痛感させられた。

そんなことに思いを巡らせていると、エミルがいきなり立ち止ま
って、振り向いた。

「何があつたのかは知りませんが、あまり思い悩まないでください。これからのことは、僕が保証します」

「え……あ」

顔に出てたんだな、と彼女は思った。浮かない顔をすれば周りが心配する。あまり気負わないようにしよう。

「もうすぐ僕の小屋に着きます……が」

「？」

エミルは小屋があるであろう方向を見つめ、そつと呟いた。

「何かいます……」

それは、エミル特有の何かが気配を察していたのだった。

EPISODE 3・憂鬱 暗い森の中（後書き）

CHAPTER 2：愉快？腹黒？シャムの笑い

エミルはユウナを背中に隠すように回し、慎重に森を進んだ。

一步一步、足音を立てるのも惜しんで森の出口へと向かう。

「ねえ、何がいるの？」

不安そうにユウナは聞く。

「僕の超能力ではそこまで把握できませんが……何か生命反応があります」

「超能力？」

また、興味深くて非現実的な不審ワードが飛び交った。しかし、質問をしたり聞いたりするのも疲れていたので、あえて深く聞き入るうとはしなかった。

歯がゆい程ゆっくり歩いていった末、やがて彼らは、もう森の出口まで十歩数えるばかりのところまで来た。木の向こうにはなだらかな草原が垣間見られ、明るい蒼い光がほんのりと目に留まる。

必要以上にゆっくり歩いていったが故に、逆に疲れてしまったユウナは森を抜けた安堵かほっと息をついた。また気持ち悪い生物を触ったりコウモリに襲われたりして悲鳴を上げることないし、何より足場がしっかりしていて動きやすいからだ。

しかし、エミルは尚も警戒を怠っていなかった。何だか呆れ模様になっていたユウナは、エミルにやめるように呼びかけようとした。

「ねえエミル——」

しかしそのときだった。

——パアンツ！　パヒュンツ！

とてつもない銃声と共に、エミルはユウナを連れて咄嗟に木の陰に隠れていた。あまりの突然の出来事に思わず声を上げるユウナだが、エミルに抱き寄せるように胸に収められ、静粛する。

エミルの注意はただ銃撃犯に行き、燕尾服の懷から一丁の拳銃を取り出した。そして、いつ攻撃されても反撃できるように木に銃先を当て、構えた。

「なっ、何なの！？　いったい——」

「ただの威嚇射撃です。僕は相手方に面識があるので……ただ、ちよつと度が過ぎるだけです。……そこで待っていてください」

そう言うとエミルは、木の陰から姿を現し、銃弾の飛んできた方を見つめてこう叫んだ。

「シャム！　遊びならよしてください！」

「シャム……？」

どうやら人の名前みたいだ。この世界の名前は全てスペルが英語？だから判りづらい。

そのとき、シャムと呼ばれた相手から返事があり、エミルは立ち止まった。

「さすがだなっ！ エミル。たった一発で見抜くなんて」

「あんなことをしてくるのはあなたしかいません。それに馬鹿を言わないでくださいよ、今は――」

「あーあー、聞いたぜ。プリンセスがいるんだっただよな！」

すると、なんでそのことを知っているんだ、と言わんばかりの顔をした。

ユウナもその話を聞いていたが、どうやら彼女は既に第二世界中に知らされているみたいだった。そしてそれがどういう意味を指し示すことになるのかは、これから明らかになる。

シャムは自らこちらへやってきて、視界の端にユウナを捉えた。

彼は年齢で言うと十三、四歳くらいのまだまだ幼げで可愛い男子だった。長くて固まった髪から少しだけ覗かせる耳には、銀の星がぶら下がったピアスがつけられている。黒いズボンとベルトの腰の部分には、左右両方に拳銃が一丁ずつ収められていた。

「俺さ、盗賊に成り下がっちゃったんだよねえ」

シヤムは突然語りだした。

「働いてたところに暇を出されたから、盗むしか生きる方法なくってさ」

そしてエミルに言い寄る。エミルは興味が無いと言わんばかりに呟いた。

「仕事をサボったりするから悪いんです。それに、盗賊になっただて……」

エミルも、彼の生い立ちについて何か知っているような言い草だった。

と言っても、エミル自身「面識がある」と言っていたわけなんだし、不思議でもない。

シヤムはさらに一步前へ進むと、ちょうどエミルの前で立ち止まり、腰に掛けていた一方の銃をエミルの顔面に突きつけた。

「でもさ、すっごいお宝見つけちゃったんだ」

「何のつもりですか？」

ユウナは目を大きく見開き悲鳴を上げた。

銃口はしっかりとエミルの額に当てられている。銃の引き金には手をかけられ、もしも偶然にそれを引いてしまったら、エミルは確実に逝けるだろう。

シャムはニシシと笑い、ユウナをちらりと見遣って答えた。

「プリンセスを奪って、高く売りや、もう一生分の金が入るぜ。そのためには、悲しいけど幼馴染のあんたには死んでもらわないとな、エミル」

あつさりともないことを言うシャム。

ユウナは物陰から非難した。

「って、幼馴染なのに自分のためなら殺すって、あんたどれだけ根性腐ってるの!？」

「んー、っていうか生きるためにはシカタないことなのさ。わかってくれよお姫さん」

「生きるために幼馴染を殺め^{あや}、さらにはプリンセス……ユウナを『物』として売買、ですか」

エミルは俯き、相変わらず淡々とした口調で呟いた。

「許してくれ、相棒」

シャムは苦笑いを浮かべながら言う。だが、エミルは反発した。

「許しません!」

その瞬間、シャムがエミルに向けていた銃が音も立てずに曲がり

始めた。何か強い力がそれに働き、銃口を天に向けている。

「僕が超能力者だと言うことを忘れないでください」

「なっ」

そして、怯む暇もなくエミルの強烈な拳が腹部に突き刺さったかと思うと、シヤムは苦しそうに膝をついてしまった。

本当に一瞬の出来事だった。そして、誰が見ても決着がついていた。エミルは持っていた拳銃を彼の額に向け、蔑むように言う。

「ユウナを護るためには、悲しいですが幼馴染のあなたには死んでもらわないといけませんね」

「うぐっ」

そしてシヤムのセリフを突き返す。

しかしそのとき、ユウナは飛び出した。

「待って！」

エミルは振り向く。

「なんでしょうか？」

「えっと……その、殺さなくてもいいんじゃない？ 勝ったんだし、別に——」

こんなとき、何て言っているのかわからなかった。

ただ、たとえ自分達を殺そうとした相手でも、もう勝敗は決しているのにわざわざトドメを刺さなくてもいいのではないかと思ったのだ。

「そ、そうだよ。ほら、さっきのは冗談だつてっ！」

エミルはシャムに銃口を強く押し付けて黙らす。

「なんとなくエミルの考えてることはわかるけどさ……。簡単に人殺すのって、あたしは反対だよ」

「……」

人の死の重みを知ってるだけに、その言葉の意味は大きい。

「そうですか……」

エミルは呟く。そして、その銃を下ろした。

「わかりました。シャム、ユウナに感謝しなさい」

あくまでユウナの要求に免じて、だ。彼の中に、それ以外何も無かった。

しかし、次の瞬間シャムはあざ笑った。

「ニッシシ、この馬鹿夫婦め！ 俺を生かしておいたことを後悔させてやるーっ」

そうして、シャムは消えるように飛び去って行った。

シャムの高笑いがこだまする森には、エミルとユウナだけがただひっそりと佇んでいるだけだった。

「ユウナ、やはり殺しておいたほうがよかったですね」

「……まあ、いいんじゃないの」

ユウナはエミルに微笑みを浮かべ、歩み寄った。

CHAPTER 2：愉快？腹黒？シャムの笑い（後書き）

次章よりちょっとシリアス逸れるかも？ですっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5886e/>

GATE & PRINCESS 私の心の中に――

2010年10月20日18時54分発行